

ひょうたん島通信

大槌発! 第48回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいじまという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



沿岸センターとの関わり ～外から内へ

佐藤克憲 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター
事務室 係長

私は2018年4月に当センター事務部へ異動してきたのですが、同年3月までは本学が岩手県内の東日本大震災復興支援の拠点とし、同月に閉室した「救援・復興支援室遠野分室」に4年9ヵ月間勤務していました。遠野分室では、本学で一番震災の被害を受けた施設である沿岸センターと、所在地の大槌町の復旧・復興状況を把握し大学本部へ報告する必要があったことから、私の前任者も含め、大槌町をかなりの頻度で訪れていました。センターの教職員の方とも、特に事務職員の方と定期的に情報交換を行い、協力関係を築いていました（まさか自分がそこへ異動することになるとは思いもしませんでした）。

被災前の旧センターには、震災前に知り合いの先輩職員が赴任しており、私自身岩手県出身ということもあって何度も訪れていました。その時の、多少古いながらも充実した施設・設備が記憶に残っていることもあり、遠野分室に来てセンターに関わってみて、被災前とのあまりの研究環境の違い（3階建ての建物の、

3階部分のみ改修して使用。敷地内の他の施設・設備なども多くが使用不能）に、先生方から生物資源等の震災による影響などの調査・研究が進んでいるとお聞きしてはいても、本当のところはそれほど進んでいないのではないかと若干疑問も持っていました。

実際に自分がセンター内部の人間になってみると、震災後の早い時点から施設・設備をやり練りしながら着実に調査・研究が進められていること、研究だけではなくその内容を分かりやすく一般市民に報告する活動を積極的に行っていること、新たな文理融合のプロジェクトを立ち上げ三陸沿岸地域の復興・振興に資する次世代人材育成を目指していることなどが分かり、心配が杞憂だったことに安心した次第です。

建物が再建されこれから設備も更に充実する沿岸センターの今後の研究・活動に、手前味噌ながら期待が膨らみますが、そのためには事務部のしっかりしたサポートが必要となります。私自身は現在、これまでに経験していない業務を担当し



震災前の沿岸センター屋外施設（2006年8月撮影）

ており、処理に未だ四苦八苦していますが、歴史あるセンターの建物が再建された年からサポート業務に携わることができるとするのは貴重な経験であり、それを励みにして引き続きセンターの円滑な研究・活動の推進に尽力したいと思います。

なお、今回で「ひょうたん島通信」は最終回となります。次回からは「ひょうたん島通信」第46回（no.1515）でご紹介した「海と希望の学校」の活動をお伝えしていく予定です。引き続きお付き合いのほどよろしくお願いいたします。

調査船「弥生のつばやき」

（「復旧」じゃない）「復興」は続くよ



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早5年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、センター界隈の最新トピックをお伝えするこのコーナーも担当しています。

このつばやきが皆さんに届く頃には、いよいよ営業運転開始目前となっていますが、以前つばやいた（no.1515参照）ように、2019年3月23日、おらが大槌の鉄道JR山田線宮古～釜石間が、三陸鉄道リアス線の宮古～釜石間として開通します。東日本大震災の津波被害により、線路が鉄橋ごと流失しましたが、丸8年の年月を掛けて再建、開通し、おそらく地元住民の皆さんに熱く歓迎されるであろう姿を想像すると、同じディーゼルエンジンで動く仲間として、我が事のように嬉しく

なります。

写真は、今年1月下旬の試運転時のものです。再建された鉄橋の上を力強く疾走る姿は、地元の皆さんの生活の足としては勿論、今年秋に開催されるラグビーW杯会場（スタジアム最寄りの鶴住居（うのすまい）駅は大槌駅のお隣です）へ、外国からのファンも導くことを確信しました。長らくお付き合い頂いた私のつばやきですが、今回を以てお休みを頂きたいと思

約4年間、本当に有難うございました。



フィールドは違えど、同じ心臓（エンジン）で動く仲間として、共にこれからも「がんばっぺし!!」

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）